

平成 21 年 6 月 1 9 日現在

研究種目：若手研究 (B)  
 研究期間：2006～2008  
 課題番号：18730485  
 研究課題名 (和文)  
 高等学校カリキュラムにおけるキャリア教育と教科教育との関連性に関する調査研究  
 研究課題名 (英文)  
 Research on Relevance between Career Education and Subject Studies in High School Curriculum  
 研究代表者  
 岡部 善平 (OKABE YOSHIHEI)  
 小樽商科大学・商学部・准教授  
 研究者番号：30344550

## 研究成果の概要：

本研究は、高等学校でのキャリア教育と教科教育がどのように結びついたとき、生徒のいかなる行動を引き起こすのかについて、理論的、実証的な検討を行うものである。まず第1に、生徒はキャリア教育での諸活動を通して職業世界に一定の関心を示しているが、職業世界と日常的な教科学習との関連性については認識が希薄であることを指摘した。第2に、生徒はキャリア教育の諸活動の意味および効果を、高校卒業後の仕事ないし大学への移行に伴う学習経験の変化を通して事後的に認識することを解明した。第3に、生徒の教科学習への取り組みを促進する上で、カリキュラムガイダンスが一定の有効性を示すことを報告した。また、キャリア教育としてのガイダンスの在り方として、継続的なキャリアプランの作成を取り入れるなど、生徒が回顧的に学習経験を意味づけ、再認識する契機として活用することの重要性を指摘した。

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,400,000	0	1,400,000
2007年度	700,000	0	700,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,700,000	180,000	2,880,000

## 研究分野：

科研費の分科・細目：教育学／教育学

キーワード：(1) 高等学校 (2) キャリア教育 (3) 教科教育 (4) レリヴァンス  
 (5) 学習キャリア (6) カリキュラムガイダンス

## 1. 研究開始当初の背景

本研究の関心の背景には、わが国の中等教育におけるキャリア教育の進展がある。とくに高等学校においては、近年インターンシップや職場体験、高大連携など多様な試みが実施されている。これらキャリア教育の試みは、生徒が将来の進路を見据えながら現在の教科中心の学習を意味づけることができるよ

う支援することを目的の一つとしている。しかし、キャリア教育と教科教育との間には、このような調和的關係のみを想定することはできない。なぜならば、キャリア教育において生徒は自己探求的で能動的な学習者であることを要請される一方で、教科教育においては受動的な知識の受容者であることを要請されるからである。職場体験や大学での

体験授業において問題発見的思考やコミュニケーション能力の重要性が強調されながら、学校での授業では構造化された教育内容の習得に従事するという状況は、その典型例であろう。すなわち、キャリア教育と教科教育とでは生徒に求められる学習者としての役割が異なっており、ここにキャリア教育と教科教育をめぐる緊張関係を見出すことができる。

キャリア教育と教科教育が内包するこうした緊張関係は、カリキュラム編成の段階で十分検討されなければならない課題である。にもかかわらず、従来のキャリア教育に関する研究は、この緊張関係にあまり注目してこなかった。そのため、いかなるキャリア教育をカリキュラム全体の中でどのように位置づけていくか検討するための基礎的資料を欠いている状況にあった。

## 2. 研究の目的

上述の背景および関心に基づき、本研究では、高等学校カリキュラムにおけるキャリア教育と教科教育との関係を、生徒の学習活動および進路展望の観点から実証的に解明することとした。そのために本研究では、教科教育においてタイプの異なる複数の高校を調査対象校として選定し、キャリア教育の実施形態および生徒の学習活動と進路展望の実際を比較検討する。具体的な研究目的は以下の通りである。

(1) 普通科、専門学科、総合学科の各校種からキャリア教育推進校を調査対象校として選定し、キャリア教育の実施形態について比較分析を行う。

上記三学科は、教科教育の内容において異なるタイプの学校であり、それゆえキャリア教育の捉え方、実施時間、内容等においても差異があるものとする。この差異を教育課程、指導計画、卒業生の進路状況、教職員への聞き取り調査等を通して検討し、どのようなキャリア教育がいかなる学校の特性によって行われているのか分析する。

(2) 生徒のキャリア教育に対する意味づけと、これに基づく適応行動を調査する。

上記(1)で述べた差異は、キャリア教育の効果の在り様にも影響を与えることが想定される。本研究では、この効果における差異を、生徒のキャリア教育諸活動に対する意味づけ、教科学習との関連づけ、および進路展望の形成の各観点から時系列的に調査し、キャリア教育を取り入れたカリキュラムへの生徒の適応過程を検討する。

(3) これらの分析結果に基づき、カリキュラム全体におけるキャリア教育の位置づけおよび実施形態の在り方を、教科教育との関係において検討する。

## 3. 研究の方法

本研究は、文献研究および事例校における調査・資料収集によって研究目的の達成を図る。具体的な方法は以下の通りである。

### (1) 文献研究

主に日米英のキャリア教育に関する文献の収集および読み込みを行う。また、OECDを中心に「学校から仕事への移行」に関する国際比較研究がなされており、その報告書の収集、整理、および読み込みをあわせて行う。

さらに、近年認知科学および学習理論の研究領域において「仕事の中で行われる学習」との比較から学校教育における学習を捉え直そうとする研究の蓄積が進展している。「学習者の仕事および高等教育への円滑な移行」という観点から従来の教科教育の再構築を図る上で、これらの研究成果は貴重な示唆を提供してくれるものと推察され、その収集、読み込みが必要となる。

### (2) 調査・資料収集

本研究の調査は、キャリア教育に関する大規模な実態調査ではなく、理論構築のためのデータ収集の意味合いをもつ。とくにキャリア教育と教科教育の相互関係が生徒に与える効果を解明する上で、生徒の学習活動および進路展望の形成過程に関する詳細な時系列的データは不可欠である。

そこで、本研究では事例研究の手法を用いることとする。すなわち、

① 独自に選定したキャリア教育推進校および文部科学省指定のキャリア教育研究開発校において、教育課程、指導計画等の資料収集、教職員への聞き取り調査を行い、キャリア教育の内容、実施形態、教科教育との関連性を比較分析する。

調査対象校は、普通科2校、専門学科1校、総合学科3校の計6校である。

② 上記調査対象校のうち北海道地区の高校4校(普通科1校、専門学科1校、総合学科1校)において、生徒のキャリア教育諸活動に対する意味づけ、教科学習との関連づけ、進路展望の形成過程に関する定期的な参与観察、聞き取り調査、および質問紙調査を実施する。

③さらに上記調査対象校のうち北海道地区の事例校（普通科1校）において、キャリア教育諸活動を通じて獲得されたスキル、知識等、キャリア教育の学習面での効果に関する卒業生調査を実施する。

#### 4. 研究成果

(1) 学校での学習経験が生徒の将来展望およびキャリア形成にいかなる作用を及ぼすかについて、わが国および英米のキャリア教育研究の成果を検討した。学校での教育内容と職業生活、社会生活との間にいかなる関連性をもたせるかという問題は、「教育内容のレリヴァンス」の問題として扱われている。「レリヴァンス」（関連性・有意性）とは「教育内容と現実世界との意味連関」を示しているが、本研究では教育内容と現実世界との関連性、とりわけ職業世界との関連性の在り様が、生徒のキャリア形成に対して顕在的、潜在的に作用している点に着目した。

(2) 教育内容と現実世界との関連性を「教育内容の社会的レリヴァンス」として捉え、生徒による「社会的レリヴァンス」の認識の形成という観点からどのようなキャリア教育を構想しうるかについて、予備的な事例調査を行った。これが、本研究における第一段階調査に当たる。

①調査の対象および方法は、

- ・北海道と埼玉のキャリア教育推進校5校（普通科2校、専門学科1校、総合学科2校）での資料収集、生徒および教員への聞き取り調査

- ・北海道地区の事例校におけるキャリア教育諸活動の効果に関する卒業生調査である。

②調査の結果、生徒はキャリア教育での諸活動を通して職業世界に一定の関心を示しているが、職業世界と日常的な教科学習との関連性、すなわち「社会的レリヴァンス」については認識が希薄であること、また、「社会的レリヴァンス」に対する認識は高校卒業後の仕事ないし大学への移行に伴って事後的に形成される傾向にあることが示唆された。

(3) 上記の予備的調査の結果に基づき、いかなる学習経験が生徒の「教育内容の社会的レリヴァンス」に対する認識を促進するのかについて、わが国および英米のキャリア教育研究の成果を検討した。とくに、生徒の学習に対する構え・様式の変化を表す「学習キャリア」の概念に基づき、中等教育から高等教育、職業世界への移行に伴い学習者の学習経験に一定の不連続性が見出されることに焦点を当てた。そして学習者は、これまでの学習の仕方が通用しなくなったとき、すなわち

学習経験の不連続性が顕在化したときに、初めてキャリア教育の諸活動の意味を認識する点に着目した。

(4) 上記の理論的示唆に基づき、生徒の学習経験の不連続性に対するキャリア教育の顕在的、潜在的な効果について事例分析を行うこととした。これが本研究における第二段階調査に当たる。

①調査の対象および方法は、

- ・北海道と埼玉のキャリア教育推進校4校（普通科2校、総合学科2校）での資料収集、生徒および教員への聞き取り調査

- ・北海道地区の事例校におけるキャリア教育諸活動の効果に関する卒業生調査

である。この第二段階調査においては、キャリア教育の学習面での実際の効果を測定することが焦点となるため、とくに後者の卒業生調査の分析を集中的に行った。

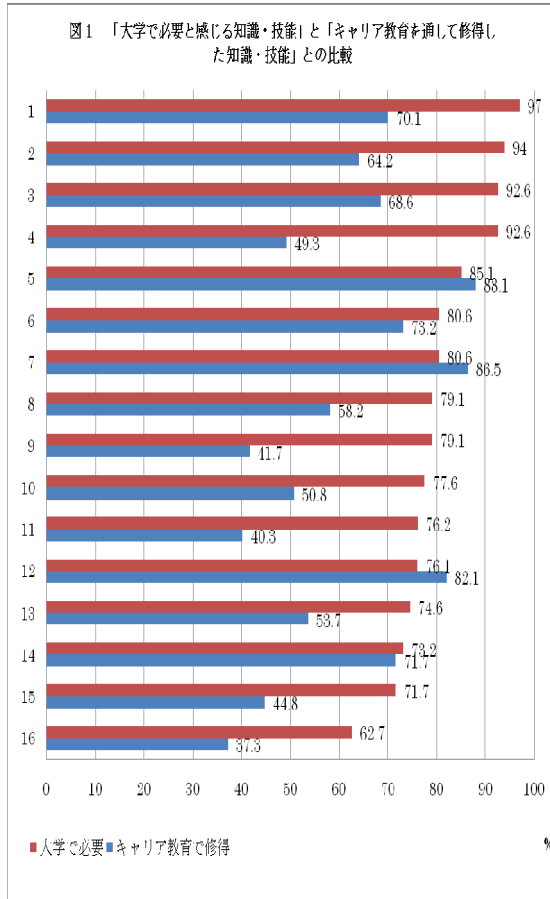
②卒業生調査の対象校であるA高校では、「ゼミ活動」と「個人課題研究」という二つの活動を中心とした独自のキャリア教育を実施している。A高校では、2年次より従来のホームルームを「ゼミ」と呼ばれる学習集団に再編成している。ゼミとは「コミュニティ」「経済」「人権」「フード」「メディカル」「環境」「いのち」「平和」の8つのテーマ別に構成された学習集団であり、生徒は進級の際にいずれかのゼミへの所属を選択し、主に総合的な学習の時間を利用して各ゼミのテーマに基づいた課題研究、見学旅行、職場体験を行っている。3年次になると、生徒はゼミに所属したまま個人課題研究に取り組むことになる。研究テーマの内容設定は自由であるが、多くの生徒が2年次のゼミ課題研究の成果に基づいてテーマ設定を行う傾向にある。ゼミ課題研究、個人課題研究のいずれも、その研究テーマは大学の学部・学科の内容を想定したものとなっており、生徒は課題研究の過程でゼミを中心とした進路を展望するための準備集団を形成する。

③A高校でのキャリア教育の学習面での効果について卒業生調査を実施したところ、以下の結果を得ることができた。

- ・生徒はキャリア教育での諸活動の意味を、高校卒業後それが行われたのと同様の状況に置かれたときに事後的に認識する。

- ・次頁の図1が示しているように、生徒はキャリア教育を通じて修得したスキルとして、活動の方法やテクニックに当たる「テクニカルスキル」を多くあげる一方、集団内での協力関係を築くための「ヒューマンスキル」や、「ものの見方」「世界観」に当たる「コンセプチュアルスキル」についてはキャリア教育ではあまり修得できなかったにも関わらず大学での学習活動では必要とされると見なしている。このことから、キャリア教育がど

のようなスキル形成に効果的だったかに関する生徒の意味付与において、「テクニカルスキル」については認識されやすいが、「ヒューマンスキル」や「コンセプチュアルスキル」については認識されにくい傾向にあることがわかる。



- 図1の縦軸の項目について：
- 1 = 自分の考えをわかりやすく説明できること (コンセプチュアルスキル)
  - 2 = まとまりのある長い文章を書く力
  - 3 = 本や新聞記事の内容をまとめるだけでなく、自分なりの意見やアイデアを取り入れること (コンセプチュアルスキル)
  - 4 = 自分の考えていることを他の人と話し合ったり、意見交換したりすること (ヒューマンスキル)
  - 5 = 必要な情報を取り出し、整理する力 (テクニカルスキル)
  - 6 = 本や新聞記事に書かれていることの意味を自分なりに解釈する力
  - 7 = インターネットを操作し、利用する力 (テクニカルスキル)
  - 8 = 本や新聞記事の内容を要約できること
  - 9 = 日頃からニュースや新聞記事を見たり読んだりしていること (コンセプチュアルスキル)
  - 10 = 実験や調査、インタビューなどを通して

- 自分独自の情報を集めること (ヒューマンスキル)
- 11 = ある意見を鵜呑みにしないで、批判的に読み取る力 (コンセプチュアルスキル)
  - 12 = パワーポイントを使って効果的な発表をする力 (テクニカルスキル)
  - 13 = 自分なりに学習計画を立て実行する力
  - 14 = シラバス等を適切に使い、科目を選択していくこと
  - 15 = 表・図・地図・グラフが読めること
  - 16 = 基本的な公式や事柄などを記憶し、必要に応じて思い出すこと

以上の結果は、「ヒューマンスキル」と「コンセプチュアルスキル」の形成の観点からキャリア教育を構想していくことによって、学力形成とキャリア教育を有機的に結びつけることが可能であることを示唆している。

(5) 上記の研究結果を踏まえ、生徒の教科学習への取り組みをいかに促進するかという観点からキャリア教育の在り方を再構築するための理論的枠組を考察した。とくに本研究が着目したのが、キャリア教育としてのカリキュラムガイダンスの役割と意義である。従来のカリキュラムガイダンスは、学習者に将来の目標およびその目標を達成するために何を必要とするのか考えさせることを通して学習の見通しを形成し、学習者の内発的動機づけを高める手法として用いられてきた。それに対して、主に近年の欧米におけるガイダンス研究は、社会的公正の観点から、学習者が回顧的に自らの学習経験を意味づけ、再確認する契機としてガイダンスの在り方を再定義しようとしている。また、これらの先行研究の検討から、学習経験の振り返りと意味構築の具体的な手法として、「キャリアプラン」の作成の有効性が示唆された。

(6) 上記の理論的検討を受け、キャリア教育におけるカリキュラムガイダンスの役割と意義について事例分析を行うこととした。これが本研究における第三段階調査に当たる。

- ① 調査の対象および方法は、北海道地区のキャリア教育推進校3校(普通科2校、総合学科1校)での資料収集、生徒および教員への聞き取り調査である。
- ② 調査の結果から、
  - ・「将来の目標では動機づけられないタイプ」の生徒が一定数存在し、これらの生徒に対して「見通し」としてのカリキュラムガイダンスはその有効性に一定の限界があること
  - ・学校から進路先への「移行期」におけるキャリア支援ないしサポートが看過されがちであること

が明らかになった。

③こうした状況に対して、事例校であるH高校において実施されていた「キャリアプラン」作成の実践は、きわめて示唆的な試みであった。総合学科であるH高校では、生徒は1年次にガイダンス科目である「産業社会と人間」においてキャリアプランを作成し、さらに3年次の総合的な学習の時間において再度キャリアプランの作成を実施している。生徒は継続的なキャリアプランの作成での振り返りを通して多様な語りを展開し、自らの関心や目的、展望の変化の過程を認識していくよう促される。こうしたカリキュラムガイダンスの実践は、学校から進路先への「移行支援」を含めた、生徒の状況の変化に対するフォロー機能としての役割を果たしていた。また、こうした「振り返り」の機会は、生徒がカリキュラムに対していかなる意味を付与しているのかを把握するための質的資料収集の場ともなることが明らかになった。以上の結果は、キャリア教育としてのカリキュラムガイダンスを、教科教育も含めたカリキュラム評価・改善の資料収集の場として再構築していくことの重要性を示唆している。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計3件)

①岡部善平、振り返りとしてのキャリアプランーカリキュラムガイダンス再考のための一考察一、日本カリキュラム学会第19回大会、2008年7月5日、鳴門教育大学

②岡部善平、高校でのキャリア教育に対する大学生の意味付与に関する事例研究ー高校から大学への移行に伴う学習経験の変化に着目して一、日本カリキュラム学会第18回大会、2007年7月7日、埼玉大学

③岡部善平、「教育内容の職業的レリヴァンス」と高校生のキャリア形成ー高大連携講義「携帯電話をめぐる5つのエピソード」を事例として一、日本カリキュラム学会第17回大会、2006年7月8日、奈良教育大学

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

岡部 善平 (OKABE YOSHIHEI)  
小樽商科大学・商学部・准教授  
研究者番号：30344550

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

(3) 連携研究者 ( )

研究者番号：